(郵信省認可)
義大利雜誌
第四號

義太夫雜誌第四號目次

論說　義太夫と國家の關係……桃の家鶴彦……一頁
寄書　院本の話……加藤尾花……四頁
傳記　竹本義太夫の傳……蜂の家霞……五頁
投書　竹本出雲の小傳……杉山大作投……七頁
文園　れかる勘平雪冤談……豐澤團平……九頁
　　誤辯……十頁
　　節の和歌……十一頁
　　あしかりのだん……十二頁
批評　喩快歌……翼々居士……十三頁
　　釋尊の喩戲譯……菅廟邊人……十三頁
　　句評……大隅太夫。團平。此太夫。伊達の事……釣深亭……十四頁
　　太十と三日太平記の比較評……仝人……十四頁
雜錄　京枝の事……十六頁
　　竹本東玉の事……七文字屋微笑……十七頁
　　女義太夫の名稱の事……十八頁
　　おちやぴいの事……十九頁
雜報　義太夫演劇幷女義太夫像想……十九頁
　　陸中花輪町千太郎の事……二十頁
　　英語の摘譯……二十一頁
　　椀久の事……樂壽亭壽樂……二十二頁
　　巢林翁の逸事……服霞峰……二十三頁
　　陸正義の親睦。團玉の歸國。諸新聞
餘興　義太夫雜誌評。其他數件
　　物はづくし……二十五頁

◎義太夫練磨會廣告

本會ハ明治廿五年の九月創立せしものにして會員既に三百有餘名の多きに至れり本會の要旨ハ採長補短を本とし切瑳琢磨の効により義太夫謠曲の進歩を計り俚俗の快樂をして優逸ならしむるにあり左れば入會を望まるゝ諸君は藝人と否とを論せず黨派を問わず老幼男女に關せず廣く之に應するものなり規則書を要せは郵劵二錢封入本社内左の者宛にて御申込次第進呈すべし

廿六年三月　幹事　樂壽亭壽樂　七文字屋微笑

花の雫

毎月二回。五日。廿日發行一部定價三錢五厘十部前金卅錢郵税十錢

一本誌は四方雅伯粹士の名吟玉句を集め有名なる宗匠大人に撰評を乞ひ其最高妙なる者而已を掲載する者にして恐らくは風雅雜誌中此右に出るものなからん

漫筆　金花猫翁假名垣魯文
小說　松林伯圓先生演其他艶文戲文古事雜錄
發句　定撰　夜鶴庵覺齋　夜雪庵金羅　輝素庵桂香　不白軒梅年　其角堂機
情歌　一定撰　夜鶴亭金升　醉花園醒水　櫨の屋笆人
　　の各宗匠
狂句　會田皆眞大人　狂歌　秋琴亭緒依大人
狂詩　櫨の屋笆人先生
冠句　林鴻堂万年壽量坊四山の各宗匠

花の雫發行所　東京市京橋區銀座二丁目十三番地　芳文堂

題近松翁之像

穗積以貫

見性却清醇　享齡擬壯椿
春温渾滿腔　空眼轉供釣
匂翰譜歌妙　少誠淸詣神
申休門榜燦　樂隱特
相親

明治廿六年五月　日印刷納　日出版
発行兼編輯人　岡田康二
印刷者　奥山東太郎
東京市神田区錦屋町廿二番地
義太夫雜誌社

義太夫雜誌　第四號　明治廿六年四月三十日　發兌

論說

義太夫と國家の關係（承前）

義と誼とは音相通し經緯正しきおとに用ゐられて常に端嚴方正の意味を含有し四角ばつた樣あり又擬の字僞の字にも通して嘘の意味もあり故に擬齒を義齒と云ひ養育又は結緣の親を義父と云ひ又義兄弟と云ふ如く生れながらの眞にあらざる總て結約上の者に用ゐ來れり故に義の字は邦權時代の戰爭多き時に當て締約の具とし効力あり故に後世亞聖とも云はれし孟軻は此上に仁の字を付し仁義として齊の宣王等の如き疆國の王に說き人心結合の用に供せむとしたれども齊は之を用ゆること能はずして後に亡ぶ然れども其義を說くや元より虛謀なりと莊子准南子の如き人は之を哂へり譬へば仁義の如き者は鎖鑰の如きものにして人心を結合するの道具なれども若し大なる賊出て來るときは鎖鑰の堅きおとは恐れず其筐ともに運び去るか故に却て鎖鑰が途中で碎けはせざるやと夫而已を厭ふとかや斯の如き眞道ならざる者も時世によりて大に用をなすおとあり從隷の子が主家の子の爲に身代りとなり又は天賦の大切なる身を以て產みなしたる父母の孝養は省みず主人の

爲とて肉緣もなき人の爲に屠服したり討死したりして殘れる老人は歎きは中に苦死するが如き事は邦權時代の常なり譬へは爰に楠子の如き君皇の爲めには忠節無比の人あるも老母に先立ち討死せは母の爲には眞實の道德より云へは不孝と云はさるを得ず然れども若其子にして母の孝養を欠くの恐ある爲に王師に屬そるを得すと云へは母も亦忠烈の婦なるか故に自害しても子にヒケを取らする事はよもあらじ然らは子は寧ろ討死しても母の心情を傷はさるおそ之を忠孝全き者と云ふ是ぞ則ち邦權時代の通義なり

未來の道德世界は然ふず軍を起す者は大なる罪人なり万一軍を仕かけられて止むを得す防禦を爲すを必要とするおとあるも勞力に因て親子を扶育する樣なる貧人は其軍に從ふへからす但し壯丁獨身のみ出て丶戰ふへし如何となれば軍は國事の衝突より外に起るの道なければ假令我味方敗北したりとて國事に關係せさる者までも捕へ去る事なければ戰ふて傷き又は打死して遺族に愁嘆を與へむより寧ろ味方の國の權利の幾分は敵國へ奪ひ取らるゝおとあるも我一家にとつては家に居て身を安全にするが大に利益なりと考ふるときは眼前敵の侵入することあるも遽て丶兵戒を擔き出す者はあらじ味方の國民もし各自に斯の如き感情を懷き一己一身我家を思ふおとの切なる時世とならは敵國と雖も同しことにて老親幼若を捨て置き他國までも軍事に從ひ征く者はあふじ加之若も軍事を起さんとするものあらは譬ひ名義は如何共大罪人として部下に嫌ふはれかの巨砲や水雷等の軍器を見る時は今の死刑臺を見るよりも胸惡るく感して終には壯なるも强きも軍事を說くおとの何よりも恥しきおとなるべし然ふば國事に何程の紛議あるも戰爭と云ふ最後の手段の賴む一き所なければ何時も圓滑に治るや必定なり

故に物に形狀して云へは正義は四角張て究屈にしてつまり脆弱なる人爲の者なり道德は之に反して圓々端なく爭ふ處おく極めて堅牢なる天然自然の道なり見よ彼の宇宙の万象大なる者ハ日月星辰より小なるものは草木に至るまで數分子を以て構造せる者は（一種の分子の凝絡せる結晶体の外）悉く是圓形に象れり故に其体や諸分子相支持して堅牢なり竹條細しと雖も積雪に壓せふれて挫折せず卵殼薄しと雖も指間に潰し難きは是其圓形なる故あり、人の骨も固くしてよく百斤の重きを擔ふへし草木の實も圓けれはおそ踏るゝも流さるゝも百千の艱難を忍び得て時節を俟ち發芽するおとを得へし地球其他の天体も圓きが故に無限の久しきに耐へて四時の變化のあるおとを得るなり若も造化が我々の如く家を作るにも箱を作るにも方正の矩義を弄して四角に物を作りしならは天地間の者は片時も挫折衝突等を免れさるへし（今日洋書の飜譯上に借り用たる義務等の字を混同し賜ふな）斯の如くに論し來る時は今日まで數日を費やして說來りし忠義正義の義の字は皆人工虛造の者なれは今は無用の者なるかと怪む樣なれとも決て然らず今日の人類は末を動物的の欲情に拘泥せらるゝこと多けれは片時も之を離るゝおと能はさるべし現に我に限ふず東西の諸國皆海陸に巨大の兵器を以て保護ゑ居るにあふずや又我々も四角四面の倒れ易き家も堅固なりと思ひ鎖鑰を施して安んじ居るにあらずや假令莊子は嘲けりしとも往古より國賊を防くには義の一字程便利の者はあらざりき即ち家に窃盜を防くに鎖鑰を要するが如し斯る有用の文字我國に渡來してよりは義の一字大に我が邦土を保護し來れり殊に德川治平の世に於て全く腐乱に傾かんとするの際自ら義太夫と名乘出て大に我國上下の人情を動かせしは實に我祖天王寺村の一農夫五郎兵衛其人なり我輩が今日斯る重要の一字の眞意を解釋せしものは我國にまれ外國にま

れ義太夫雜誌の記者は古誕を濫用して人を迷はすなどゝ云ふ樣な愚人のあらむことを恐れてなり然して我輩は眞の道德世界として砲艦も亦無用の長物たるの日に達する迄は偏に義の字の勢力を賴むなり聊か國家の爲に義太夫謠曲の功用を述ると云爾。』

（畢）

寄書

院本の話

桃の屋鶴彦

世に行はるゝ淨瑠璃作本のうち其作意の杜撰にして前後の趣向撞着し或は言辭の穩當ならざるものを一々指摘せば實に枚擧に遑あらざるべしされども此等の作たる立作者のありて五段物。六段物。又は十二段物。等それ〳〵脚色の大躰を定め其段毎に其部下の作者數人に分ち各其負擔する所に伎倆を現はさんと各人各種の意匠を出すものなれはにや字句の間往々破綻を生し瑣末の撞着を來すが如きの弊なきを免れず殊に世話物と稱するものゝ多くは當時浪花の俗間に流傳する所の出來事即ち現時ならは新聞紙の雜報にも掲くべき情死。殺人。爭論等を種子に取りて一夜漬と唱へ今日の出來事を一兩日の中に作りて其名題看板を掲け互に新奇を爭ひなどする事昔時頻に流行せしにより其作意の如何を問ふに遑あらず拙なるも速を貴ぶの風習ありしなれは今日の文壇に繙きて學士文客の批評を下さんとするは素より大人氣なき業なるべしと雖も余が偶淨瑠璃を聞く毎に耳底に止まりて聽苦しく思へるものありそは作者の誤謬を傳へしにもあらず丸本より大坂五行と稱ふる稽古本に飜刻の際又は此道の太夫が所持する床本と稱ふるものに寫す時誤りたるを其儘に傳來して今日は常套語となりゆき之を語る太夫も之を臺詞となせる

俳優も怪ず素人までが暗誦じて成語となし居るはいかにも不都合のことゝ思へは現今在京せる此道古老の太夫に糺したるに何れも皆其誤謬なるあとを是認し余が自今發見せし如く語ふんとて床本を改めたり其一二を記さんに

泉州小田居茶屋
攝州殿下茶屋

三日太平記

明和四年丁亥臘月十四日

近松半次
三好松洛 作

竹本三郎兵衛

第九ッ目松下嘉平次住家の段にて眞柴久吉の桶皮胴丸の鎧を嘉平治に見せんとする條下に

ヤア〳〵者共言付け置きし胴丸の鎧早々是へ持ち來れ。はつといらへて下タ兜手がきにしたる具足櫃。御目通りに舁ぎ居ゆれば云々

右は誰も知りたる名高き院本の中に就て最眼目たる所なり其文句中下兜とあれども凡兵具の内にかゝる名稱のあるを知らず且此所にては桶皮胴を取寄する迄にて下兜といへるものには必用なし依て古板の丸本を見るにしたかふとあるを以て考ふるに、したかふと、とは從人なるあとを知れり『はつといらへて家來共』と云ふ常套の文句なるべきを上に『ヤア〳〵者共』とあるをもて又家來共せんも語路惡しけれは此處には從ふ人となせしなふんを後誤りて推量たがひの文字を當たるならん現今流布する所の丸本にも下兜の文字になりてありき此は古人梅壽軒竹本土佐太夫其他有名家の床本を正せしに皆誤謬を傳へてありけり』。

傳記

竹本義太夫の傳

加藤尾花

竹本義太夫は攝津國東成郡天王寺村堀越町の產にして

五郎兵衛と云へる農夫なり性質音曲を好めるを以て井上市郎兵衛（播磨椽藤原要榮。播磨節元祖）の門人清水理太夫（是又名人にして當時今播磨と稱す）の門に入り晝夜肺肝を碎きて學びける元來音聲他に秀で甲乙地合自然に備はりしかば漸々上達し清水理太夫と改名して虎屋喜太夫の芝居を勤む天和中京都四條河原の芝居に於て宇治嘉太夫（加賀椽藤原好澄）と同座にて語りたりしに天質の麗音嘉太夫を壓す奚に於て両人自然不和を生したり故に嘉太夫の銀主竹屋庄兵衛此理太夫を誘ひ安藝國宮嶋へ下り芝居を興行せしに大當りを取り夫より大坂へ歸り竹屋庄兵衛と義を結ぶ因て竹本義太夫と改名し道頓堀大西の芝居を求め竹本座の檐を上ぐ是貞享二年なり是より前理太夫窃に思らく我が語る處の播磨の流は地節長くして音を表とし節を裏にす又京都の宇治嘉太夫が流は地節短くして音を裏に隱し好んで節を細にす両流共に節の音律全かゝずイデ播磨の長きを縮め宇治の短きを伸し音の表裏を備へ節の長短を交へて序破急を定め一流を立んと種々工夫を凝し終に自ゝ得る處あり此時に當て近松門左衛門才筆を揮て之を賛く是より淨瑠璃とし云ば人皆義太夫節を指す名譽と謂べし元錄十四年巳五月勅許受領して竹本筑後椽藤原博敎と改む故に大西の芝居を筑後の芝居と云ふ正德四年午九月十日六十四才にて寂す法名道喜居士と云ふ天王寺の南超願寺に葬り今に存生す淨瑠璃百六十四番を操りに掛て語りたりと』。

因に云竹本義太夫未だ清水理太夫と云ひし頃藝州宮嶋へ下り芝居興行せし時暇ある毎に嚴嶋明神へ參籠して藝道の發達を祈りけるに明神其信心を感納したりけん或夜參籠し暫時睡眠中天童一卷の軸を齎し理太夫に授け給ふと思へば覺たり是より技藝益々上達して天下の名人と稱せらるゝに至りたりと』。！

竹田出雲小傳

峰の家霞

竹田出雲名は清定千前軒と号す江戸に生る万治元年出雲椽を受領し寛文二年大坂へ移り操り人形を創製す享保十一年近江椽と改む同十八年初めて大塔宮曦鎧を著作し其後義經千本櫻（寛保二年）菅原傳授手習鑑（同上三年）假名手本忠臣藏（寛延元年）等を著し世に傑作の評を得たり寶暦六年十月二十一日歿す時に年六十六辞世の句に

影涼し水に彌勒の腹ふくろ

○おかる勘平雪冤談

麹町　杉山大作投

虚構湼造荒誕附會の説劇部歌曲に於けるより甚だしきはなし然れとも時に或は史乘に勝るの功なきに非す豈に深く咎むるに足らず院曲の所謂早野勘平は即ち萱野三平にしておかるは大石良雄の妾れ輕なり一は得難きの義士一は希世の烈婦なり而して始めより此二人些の因縁あるよし然るに院曲は二人を以て情人となし三平は痴情の爲めに一身を誤りれ輕は身を汚泥に沉むるとなす牽强附會も又此に至つて極まれりと謂ふべし聊拙文を草して二人の冤を雪む

萱野重實は攝津萱野郷の人なり曾祖恒産始めて大島氏に臣事し祖恒重父重利相繼て祿仕す重實年甫めて十三大島義近の薦めに因り淺野長矩に仕へ擢んでられて近侍に列す元祿十四年三月長矩死を賜ひ封邑を沒せらる重實時に隨て東府にあり早水滿堯と與に馬に乘て變を赤穗に告ぐ路萱野に由る衆の喪を送る有るに遇ふ而して遇て之を問へば則ち曰く萱野重利の妻ありと意はずして凶變悲駭兼ね至る乃ち曰く今君の爲めに變を報せんとして又爰にも慈母の逝くを見る將に之を奈何せん敢て私情を以てして公事を忽にせんやと鞭を揮ふて去る遂に赤穗に至り其由を城中の諸人に告く既にして幕

府監司を遣はし其城邑を收む是より諸士四散し各適く所に從ふ重實は乃ち萱野に隱れ以て母の喪を終ふ大石良雄は義族を倡率し山科鄕に在り相距ること十里程密に報復するを得冬に至つて重實父に辭し將に東行して仕を求めんとす父許さずして曰く予汝の心を籌るに汝錄を干むるに非ざるなり將に以て仇家を刃し以て主家の恨を報せんとをるなふん若し其事ある吾族は恤ふるに足らざるなり只恐らくは吾主を累せん吾の吾君を思ふは猶汝の汝が君を思ふか如くなりと重實再び請ふて曰く願はくは吾が籍を絕たば何ぞ相累するを畏れんと父許さずして曰く骨肉の恩を絕ち以て禍患を防ぐは陋俗の爲す所吾汝に死を勸むるには非ざるなり唯汝の志を遂ぐるを欲するのみと重實其言に從ひて止まり復た東行せず明年正月十四日に至る乃ち長矩の忌日なり前夕僕に命し一通の書を齎らし良雄の許に往かしめ快よく沐浴して父及ひ嫂に見へ譚笑常の如し而して寢に就く明日加辰に及べども房戸開かず家人怪み訝り戸を排きて入れば則ち東に向ひ自裁して死す家人錯愕走て父に報す父固く家族を戒めて泄るゝ勿らしむ之は萬一世に知らるれは多數の義士に關係の疑を及さむおとあらは大事を敗らんも圖られす乃ち暴死を以て世に聞し遽に旁近の山中に瘞む向に山科に遣はしたる者到りしに時尙未だ明けず良雄函を啓きて大に駭き同志の近側に在る者を召きて之を示す衆皆潸然則ち自盡と其刻を同くせしと死する時年二十八法名涓泉子長好孫重好と云ふ

古人所謂忠ならんと欲すれは孝ならす孝ならんと欲すれば忠ならずとは恰も三平の爲めに云ふ者の如し三平實に進退谷まり死して以て能く節義を全ふしたり其死せんとするに臨み談笑自若書を同志に遺るか如き常人の爲す能はさる所なり若し此人にして此不幸なく他の四十七人と共に仇家を襲は

しめば必す當に大に傳ふべきの功ありしならんに嗚呼

可留は京師二條橋西の女なり元祿十四年淺野氏宗を絶つ良雄迹を山科邑に晦し室を去り鰥し伴りて陽に放蕩し妓樓を周遊す叔父小山良師之れを憂ふ其妻の曰く請ふ婢妾を給して以て其志を固んと乃ち可留を得て之を給す居る事歳餘復讐の議定まる良雄將に發せんとするの夜酒を飲し可留に謂て曰く素餐日久しく術計殆んと窮す今旦に侯家に祿仕せんとし愛を割て女を遣る寧そ會期なからんやと可留の曰く妾甞て君を觀るに風姿不群なり豈衣食に汲々たる者ならんや是行や必す大事あらん但婦女多辯事を敗るを恐れて實を匿し賜ふならん妾不肖と雖も決して他言をなさを請ふ告けふれよと良雄曰く否去るおとなしと從容として筑紫琴を操す曲終る可留の曰く音朗なるおと常に異なり大慮の心にあるおと掩ふべからざるなりと固く請ふて悲泣す良雄明鑒に嘆服し且其誠心他なきを知り遂に語るに故を以てす可留大に悅て曰く妾之を疑ふこと久し今にして心潔きを得たりと語旦良雄裝載をるに旁ら可留を覩ず家人をして搜索せしむれば報して曰樓上に縊ると良雄急に其父を召び之れに尸を示す父の曰く何の故ぞ曰く別れを傷みて發狂せしなふんか父の曰く僕彼れの性行を諳んず心を喪ひ身を誤る者に非ず是れ必す大に故あるなりと切りに實を告むを請ふて已まず良雄竟に前夕の狀を以て之に告ぐ父喜で曰く君は誠に烈丈夫なり吾が女又君が事に死す幸焉れより大なるはなし君は速かに途に赴け僕請ふ後事を幹せんと良雄乃ち金若干を與へ哀しみを盡して去る

本誌第三號に故津賀太夫の事を掲けありしに誤謬の廉のありしと見え懇に團平師左の如く寄られたり

豐澤園平

傳へ聞く昔さかへ町と云ふ所に薩摩座結城座と云ふ二本の人形上るりの芝居有り又同町に歌舞伎の芝居二本有り元祖津賀太夫氏初めて席へ下りたる時運上をあげたるは人形芝居の方にして決して歌舞伎等へあけたるにあらす昔は右二座の人形上るりの座より大坂の太夫へ盆せつきには是非前金を出し出勤の約束をして正月七月の替りには大坂の太夫の出演を頼みたるなり然るに津賀丈は席へ下りたる時右二座の上るり芝居より苦狀を云たる故爲に右二座へ運上をとりたる者にて決て歌舞伎等へは少もなし(外の太夫三味せんも皆同じ)歌舞伎役者の後に後見と云ふて黑の出てたちにて付き傍ふ者有り右の姿は人形遣の風なるを以て人形使より苦情を云ひ出し爲に歌舞伎より人形芝居に運上をとりたるはあり

中古名人鶴澤蟻鳳氏後に竹本播磨太夫氏席へ下りたる時は右運上をとらざりし之は上るり座に付大に功勞ある人にて現に流行の三代記は大序より大切まて右蟻鳳丈鶴澤伊左衛門の號あり之は毎度芝居へ出勤の網笠をかむり通われしに因て人の綽名したるに縁る

猶二座の上るり芝居の外に人形芝居もありたる由篤と御調へ被下度候

文園

堪能の人のいひしはふしにふしあ
りふしにふしなし言葉にふしあり
ことばにふしなし語るにかたりて
ふしにかたるなと此六句のものは
得やすき樣にて得かたきのみよく
得たる人は誰そや。

前筑後椽藤博敬

一ふしを語り殘してうつし繪に　かり玉ふはかなしやと。思はすはしに立よりしが。あ

一ふしを語り殘してうつし繪に
いまも聲ある竹のおもかげ。

近松門左衛門平安堂巢林子讃之

あしかりのだん

なにしおふ。なにはのうふのはまかせに。もまれてそだつあしのはを。いで〳〵かつてまいらせん。げにや歌にもなにはづに。さくやこのはな。ふゆおもり。今をはるべとにほひしも。あしのはぐさの露の玉。心をみがくたねならば。人に見せばや津の國の。ながらわたりのはるげしき。ふねこぎわたる。あまをぶね。かたはのあしにさはさして。波にゆらるゝふせいとは。大みや人もゑいじけん。きくにはしもの翁草。からよもぎとはたがいひし。秋のすゝきの穗にいで〳〵。おばなといふもことはりや。人はともいへわがために。此みなぞおはちゝのさと。ゆきゝの人のあしのはに。かかり玉ふはかなしやと。思はすはしに立よりしが。あらおもしろの水の流や。筆にかくともつきすまじ。東にはやはた山崎。ながゝつゝみをまはらはまはれ。わすれたりとよ。よその見るまへおそろし。おそろしのきみのめもとは。水車のわのおとく。かはみづはあしにもまるゝ。ふくふ雀が。はつとたつみのさとよりも。舟につれ立いそ千鳥。はんまちどりの友呼ふ聲は。ちりやちり〳〵。ちりやちり〳〵とちり飛ふ所を。さいてとつたはあれ〳〵。まれ〳〵まの里の。たみのゝしまはにくかぶで。にくむはあしのわたりぞや。みつの濱邊に立煙。つりするあまの漁火か。おて打ちがふたまくらに。こゝろもよしや足曳の。山路はとをくうみちかく。あれ住吉のうふぞかし。つのくにのなにはのはるはゆめなれや。あしのかれはに風ふせぐ。にほひれおせよ梅の花がさ。ぬふてふどりのつばさには。かさゝぎも有明の月の。かさにそでさすは。天津乙女

のきぬがさ。それはおとめ。おれは又なにはめの〳〵。かづくそでがさひぢかさの。樣のあしべのみだるゝかたをなみ。あなたへざふりおなたへざふり。ざらり〳〵ざふ〳〵〳〵ざつと。かせのあげたる古すだれ。つれ〴〵もなき心おもしろれもしろや。ねぎのうはかせ。みづにさか立さば〳〵〳〵とさはのあし。なびく草木はれのづから。きみのゐかうにおそはれて。みなかさゝぎのはね合。なにはのしづがてふしもかさね。かさぬる御代の春。ことぶきいはふ舞の袖。あられめでたやめてたやと。謡ひかなでゝまひ納む。

愉快歌　葱山人

貴誌發行日。偖々愉快哉。退校歸宅時。一本購求來。演伎傍聽日。偖々愉快哉。箇々達耳時。批評得當來。休暇散歩日。偖々愉快哉。偶覗書店時。赤字射眼來。怏々不樂日。偖々愉快哉。凭欄獨唱時。自然散鬱來。

愉快歌（次韻代評）　服霞峰

投稿調査日。偖々愉快哉。貴章拜讀時。顔呈喜色來。

最善の思想を書き記し
たるこれを文學と云ふ
エメルソン

釋尊の喩戯譯　翼々居士

昔天竺國に、みめ艶しき女ありしが或る智惠淺き男に深く思ひ染られ、いつしかはなれがたなき、なかとはなりしが、女よく〳〵その男の心のそこ根を見ぬき末たのもしからす思ひけれは何とかしてきれたくは思へとも、かゝるしほもなく月日を荏苒るうち宇蘭盆の日にあたりて女云ひけるは此度の宇蘭盆會によその女房だちも、わけてうつくしく身かざりして躍にいづるとかや妾も人にれとふぬ樣裝していでたくと思ひはべれは、なにとぞ青蓮花を一りん髪の鋤にしたく思ひはべる、もし此おとれん身の力にかなひなは一りん採てた

まわれよと頼みければ男思ふやう青蓮花は長者又は王族にあらねば、なか〳〵手に入らぬ程の貴重のものなるを、かく心やすげに頼みけるは一つの難題とは思へども先に女の望みおとは何にても命に代ても果さんとまでにちかひしおとのありければ、もしわか力に及はずといへは女にさげしまれ、いやよと云へは、きらわれむ如何はせんと思ひ煩躰の見へけれは女はすかさず花一りんのねかひさへ協へぬほどのとのおにいかでか末まで添ひ遂んと云はむとするを男おれはと打消しその青蓮花とやらを我手に入れむことといと容かるへし明日まて待て賜はふは必す探て參らせむと云ふて其日は別れしも、かゝる貴重ものを卒に入れむ、てだてもあふず、ふと或る王族の坪の池に今を盛とさくと聞き忍び入て窃みとらむと鳧の鳴く擬して水の中に入り首を出しつ、しづませつ、花ある所に近つきけれは看守の者之を見咎めいかにも聲こそ鳧の樣なれども被りし羽の怪しやと、その池の中にをるは、鳧か人かと問ひけれは彼の愚の男イヱ〳〵人にはおはさぬそ鳧よ鳧よと云ひけれはれのれ偷やらしと、ひつ捕へ高手小手にいましめて牢の内へおくふれしとかや愚の者の淺智惠はその身を害ふ種なれは單慾心をすて離れかたく操を守れかし

批評

句評

菅廟邊人

三芳野は花をつくねて山もなし。　大隅太夫

散る花や硯をのするかみのうへ。　朝太夫

聞くときは浮世離れて不如歸。　織太夫

白雲をはなれきつたりうめの花。　伊達太夫

うたゝねや見ぬ山〳〵の櫻かな。　綾瀬太夫

花にうき風ややなぎにもの忘れ。　出羽太夫

春の水おゝろ〳〵に見ゆるかな。　十三太夫

よくみれはすみれ花咲く垣根哉。　津賀太夫

月一つ柳ちりのこる木の間より。　村太夫

唐崎のまつは花よりおぼろにて。　播磨太夫

大隅太夫丈の用本は故染太夫のかたなるへしと云ふ人もありさあるあとか否は知ねども餘程在來のものよりはちがひ充分に補正を加へたるものと見ゆ中に「責苦」なぞゝ云ふ樣な湯桶訓にて聞き苦しき所は責と斗り云ふて苦の字を省く所なぞ隨分細に注意行き届けり

又此丈が一行の席上の景況を摘んで云へは聽衆は皆伊達太夫が出るを待ち兼るの有樣にて伊達丈の語る間はヤンヤの喝采止みも斷らす此伊達丈の美音にして節を長く引くが細棹流行の江戸の地の人には適したるものなるへし乍去此丈は詞の煩雜の所ゐゆくと老婆も老爺も聞き分ち難くなるは一得一失なりつまり此丈の淨瑠理は語ると思はす謠ふと思へは可なふん、此丈の三絃友松丈は齡まだ餘程わかけれど鍛錬によつて尙一層の上達あるへし此丈未來の友次郎氏ならむかとはあまりに惚れたる評なるか、伊達のあとに出るは此太夫なり語りふりに爰と云ふ批難する所はなけれとも此丈の演技中は居睡を初るもの十中に二三は慥にある樣に見受たり是を以て見れは計濟の爲には矢張諷ふ方かよきかも知れむ證據なるへし、終に大隅丈の出たるときは衆皆一言を發するあとなく沈默して聞き居るは感動深きの故なるへし又一つには團平と云ふひきてに氣を奪われ居るもあるへし其證據にはアングリ口を開ひて身動きもせぬ者多きを見るへし曲譜漸く進て佳境に入りあちこち拍手喝采の出る頃は徐ど坐を立ち去る者は日本無雙とも云はるゝ人の演技を聞く程の耳を持ぬ人だと知るへし

太十と三日太平記の比較評

釣深亭

この両作は同一のことを作したる者にて互に相似たる所多くして共に語り難き作なりと云ひ傳ふ然れとも其作柄を問ふときは太平記の方遙まさりて上にあるへし先其一二の要点を擧るときは實は打死の暇乞なれとも今年妻をも持つ程の十八歳にも成り長たる屈竟の若者が、その戰亂の世の中に今日初陣とて老母の許を得にくるは餘りれかし大概今とは違ひ我國の人は競爭心に富むが故勇士の子とあれは早くて十三晩くて十六十に八九は十五にもなれは初陣するは通例なり況して光秀の子にして昨日までも大事の軍をしたる父に從はざりし者が今敗軍と知て出陣するとは親思ひとしても子煩惱としても、つじつま合はす其上初菊のくどき「祝言さへも濟ぬ内討死とはきよくがない。わしや何ほうても殺しはせぬ」杯とは情意濃なる所はあれとも貴き處女か云ふ辞に似す餘り下すばりて、もしや初菊は下賤の生れか泥水ても飲た事はないかと疑ふ程にゆき過者と思はれたり又光秀が老母をつく一件如何に賢き母の謀とは云へ敵と間違へ母をつくとは剩敵は入浴中にて他に應援のあるにもあふす裸體の者と知られたれは光秀程の勇者にして障おしに其實否をも見屆ず鎗を入れるは悪人ながふも、將軍の地位を爭ふ光秀には、うけとりにくし

其他文句にもいろ〳〵の欠点ある中に尼ヶ崎の所に「間ちかく立たるぎよりんのそなへ千なりひそおの馬印」とはよけとも「夕かほのきにきらめくせんなりひやうたん」とはおかしひさおは瓢なれとも簟は竹籠の食物を入れる全く瓢とは別物なり俗に瓢簟と續けて云ふは論語に一簟の食一瓢の飲ともある如く我儂が野遊をするにも瓢斗にては用を爲さすつまり瓢と簟と離れ難きを云ふたるへし然るに馬印に此二つがついてはおもしろかふす、殊に此所にてはたんまでつけぬ方が字數の切れ目もよし之は作者の誤ならで筆耕の誤なら

むと一言は疑ながらも辨護をなす

之に反して太平記には重次郎十三歳の初陣とあれは物車連續してあり又眞柴大領久吉は光秀と天下わけめの戰に打勝て一作が訴により籠の鳥の光秀を引き出し刎るは易けれと一旦主と呼びし松下の家の中に隱れ居ることなふば先つ禮を盡して捕へし重次郎を助けつれ來りて舊恩に報ゆるの一つの功となし快く嘉平次と和談して光秀が首受取ふむとする所に光秀も夫と悟りて緣者とは云はす一宿の報に首渡さむと進み出て最愛の一子を助けむとするも子は眼前父の死出をも見乍ふに他人と云ふて存むより子と云はれて死たしと覺悟を極めて突込短刀幼年なかふも天晴と云ふより外はなき樣に作し上けたる出來柄は感する程の出來にして順序も自ふ備はる樣に見へにける又九ッ目の口玉椿も勝れてよき出來なり斯の如く優劣甚しき二作が共に近松半次三好松洛等の作とあるは請取難き樣なれとも實際丸本に其名が入れてあるは桃の屋君の說の如く先つ大躰の骨を極る者が有て迹は銘々に分擔して行た者に相違ないよく〳〵玩味せられよ演說をするにも書をかくにも之を作るにも皆銘々の偏する所あれは凡そ一度目をつけて見た者は二度目には名を附せすとも之れをトすへき程なるも右二作に於ては如何程比較するも唯句調は勿論品位も亦大に異なるを見るのみ彼義經勳功記や布引や平假名盛衰記の如きは云すして同一の人々の作爲せしおとを知るもあり結局義太夫大流行の時作者も忙がわし誰の作にても少し見所あれは自分の名をのせてさへ置けは其名にて金になる故に實際誰やふ分らぬ者もあるべし恰も株券熱の盛なる時澁澤氏抔の名前さへあれは一圓拂込し者の數圓に登ることある同一のおとなるへし

京枝の事

女義太夫にして初めて東京の席にかゝりしはまの京枝なり此孃の初めて東京に來りし頃は席の方にて輕蔑し何れの席にても謝絶れ漸に下谷吹抜の承諾を得て爰にかゝることとなりたるも主は面目なしとて此孃のかゝりし中は家に居ふさし位なり然るに孃は此所にて一つ江戸ッ子のあら肝ひしいでくれんづとさま〳〵の舍利や道化を入れてめちや〳〵に語りしが大に人氣を得大入を受けしより他の席よりも所望する樣になり終に普通の者となりしのみならす今日女義太夫は何より評判よくなりたるは全くまの京枝孃が（今は孃てあるまいが）皷舞せし勇氣に基くとかや五名家の投票にはもれたりとてへゝ悔む所はありませんよ

竹本東玉小傳

七文字屋 微笑

東玉姓は加藤名ははま嘉水四年十二月五日大阪道頓堀に生る幼名をやゑと呼ぶ父傳兵衛義太夫を好み素人仲間の好評を得たり藝名を東玉と云ふやゑ又之を好みしゆゑ親づかふ二三のサハリなを敎へし事ありやゑ十六歳の時傳兵衛死去し其後家計の整はざるを以て、やゑは身を北新地に投し米吉と稱して藝妓となりしが特の外評判よく一年を經ざる內同地の或る豪商某に從良され妾となるに至る此人亦義太夫を好み常に春太夫咲太夫を贔負にせしかは春太夫を師とし稽古を初め大に其道を得たり其後某病死せし爲め家に歸るも生計の方を知らされは更に夫を迎へ紙商を營しが振はざりし故暫ふくにして之を閉店し決然義太夫語りとなり亡父の名を繼ぎ東玉と名乘初めて一枚看板を掲げたり時に廿二歳にて二段目の頭所謂貧神乏の位置なりしも翌年の冬には大關を占むるに至れり元來大坂は義太夫の本場の事なれは東京とは異なり聽衆もなか〳〵巧みにて東京の如く新內くずしにて瞞着し金力に因て一枚看板に成り得る處にあらされは東玉の如き初めより一枚看板を

揭げ聽衆も之を許せしは實に稀なりと云ふ二十三歳にして母に別れ夫よりは地方に出て就中長州にて好評を得東玉の爲に一の寄席を新築せし程なりし後大坂に歸り人形芝居を興行し是亦大評判なりし（當時文樂座にては春太夫咲太夫染太夫の一座なりしも東玉には及ばざりしと）爲に一年間打續けり此時廿六歳後首振を初めて發起し義太夫社會を驚かしたり明治十六年三月即ち三十五歳の時小政東代玉等を牽ひ上京し諸席至る所好評を得たり同二十一年八月亡母の十七回忌に當れるを以て法會の爲に歸坂し翌年十一月再び上京せしも演伎は心のまゝになして專ら門下に力を盡し老後の樂となせり今回投票の名望家に其名を占めしは實に其當を得たるものなり』。

雨露にうたるれはこそ紅葉の
錦をかさる秋はありけり　　讀人不知

雜錄

女義太夫名稱の事

地名は野蠻の時代より口牌に傳はるものに漢字を附けたるもの多けれは無理に宛嵌たるものあるへけれはおかしく聞ゆるもあり昔の和船の名は水上にのみ生涯を送る文盲なる者の名くるものなれは住勢丸抔と云ふれかしき名あるも宜なれと今は誰も學校へ行く日にして如何に教育がなけれはとて義太夫と云ふ文美の藝を以て生意するものが大事の看板の名前を麁忽につけるは外國人なとに聞れても我國の女子は文盲なれはと辨解するより外なく冷汗なり譬へは東玉と云ふ名はよけれと其弟子に東代玉と云ふがあるはれかし若之を東代玉と呼ふときは猶一層無理なり世間には學者も多けれは師匠より名前を貰ふとき然るへき人に相談してつけて

貰ふては如何弊社の七文字屋微笑抔も甘して斯る相談は受らるゝおとゝ思ふ又糸の字のつく者は女連中には數あれとも元來糸の字の音はべキなり清糸などゝきては誠に下されぬ味なり小住とか千とせとか越子とか云ふ先つ女の名と思ふて夫て可なるも

おちやつぴいの事

れちやぴいとは人の云ふまゝ前々号越子の評にもつけありしかば如何なるとかと人に尋ね居りし處喧しき小娘の事なるへしと云ひし人もありたれは、そうかと思ひ居たりしに矢口の渡に「義興を殺す時は命かけの事手傳はせ。御褒美貰ふ時は親方一人てあたゝまり。此六藏はれちやぴい」と云ふおとあるを見出したり左すれは英語にもあらす百年も前よりある俗語にて無駄骨を折ふせたと云ふ所へ用ひし者と見ゆれちやひきと云ふおとより出しにはあらざるか兎に角越子嬢は之にて噪ぎ娘と云ふ寃は慥に免れたり

雜報

義太夫演劇幷女義太夫豫想

近來歐羅巴の風に習ひ素人か演劇を爲すとは流行物となり海軍々人等も之を行り落語家講談師等も時々之を熱心に擬ね何れも喝采を博したれは義太夫を語る者何とて別に殘されむやと五十路を越したる鶴澤文藏等も若手に劣ふず非常の奮發にて竟に澤村座に於て本月廿一日より開場するとなれり外題は千本櫻三の口權太騙の場より御殿場まて四幕、中幕に吹寄のだむまり一幕大切辨天小僧濱松やゆすりの場に五人男二幕廿六日は之も多少義太夫に關係あるとなれはとて練磨會の人人等と弊社よりも見物に出かけしが文藏の權太は御年のせいか酢桶抱へて驅け込む所などは少々ぬるかりしと雖も腹切てかふ常々義太夫上の經驗あれは見事に出來たり御殿場の度經吹寄せの鮫七共に御苦勞津賀丈の

靜は新駒にも優りて見ゆる程の美形を呈し所爲も此人は俳優ならずと思へは何一つ不足もなく上乘の出來、只少し腰より下の加減が靜は女學校の生徒でゝも在たかと思ふ樣なりし辨天小僧も上出來なりが靜に似合ふ顏だちなれ面ざしはちとふつり合願くは暫時織太夫の頤拜借せん織丈の忠信は滿場破るが如き喝采なれは藝に於ては云はずとも第一、こせん、れさと、も可なりの出來、わけて南鄕はよく見へし、呂篤太夫の濱松屋の番頭もよき出來なり殊に引き込の時前幕の忠信の所作を擬せしとき西洋人も思はす大聲して譽たり此日西洋人の見物多かりしはいと珍らしく思へたり、此事を聞き浦部不佛鬼君は早くも手廻に此度は女義太夫の順番なりとて役割まて書て豫想を寄せふれたり

前文略もし遠からず蓋を開ば　假名手本忠臣藏大序より七段目まで中幕手習鑑車引の場其の役割は左の如し

足利直義公道行のれ輕（一二三）若狹之助一文字屋才兵衛（小虎）師直原鄕右衛門（小清）判官（越子）顏世御前竹森喜多八（花友）加古川本藏（熊玉）伴内藥師寺治郎左衛門茶道吟齋（土左吉）定九郎石堂馬之丞（駒之助）與女中紅梅せげん權六岡野金右衛門（小染）杣三五郎與女中楓（宮造）九太夫與一兵衛（大吉）道行の勘平與女中國霍梢王丸（住之助）猪狩の勘平腹切の勘平與女中霍代（小土左）勘平女房れ輕七段目のお輕（清玉）千崎彌五郎梅王丸（熊梅）寺岡平右衛門（永吉）大星力彌櫻丸（綾之助）勘平母松王丸（小政）大星由良之助時平公（京枝東玉一日替り）是れ等が丁度御手の者とは少しくコシッゲにて不公平と御立腹の御方も有んがそは義太夫好の粹樣方御立腹なき樣に願舛

編者曰　扨も〳〵氣の早い人なる哉

陸中花輪町千太郎の事

陸中の國鹿角郡花輪町は東に古川氏のフルクラ鑛山あり西に尾去澤北に小坂銀山近來僻地にしては比類なき

繁榮の地なりとかや斯に本年六十五歳なれ共鑊鑠なる義太夫好の老人あり、又十五六年前岩手縣より移住し義太夫好の老人あり此二人の盡力奬勵にて近來大に語り人も蕃たるが曩に彼龜吉の忰に千太郎とて家出して久しく音信もせざりし者が老母の病氣を聞傳歸省したるに或日話義太夫の事にうつり千太郎にも久振なれは一段行らすへしと千太郎伴れ還りし妻の三絃にて一段語りし所聲はよくて確て節は甘く各々一驚を喫せざりしはなかりしとかや、抑此千太郎が家出をせし原因を聞くに此男親に似て幼少より三絃をよくし語るも大好にて骨折たれ共其徵なく人々も汝語は止めて引く耳にせよと屢々人に意見せふれしが遺憾にて他國執行に出てたるものと見へたり然して今伴れ反りし妻は鶴澤德太郎の門人にて語も引も夫に讓ふぬ技量あり此夫婦五月間花輪に滯留し其の間に五拾人も弟子つきしがまだ執行の足らぬ身なりとて衆の止るも聽す夫婦伴にて出て行きぬ解に精心一到とは此事や云ふゆむと同地よりの報

英語の摘譯

前號に募集した二句の英語の内第一を譯したる人はお先へ御免下さい

本所の栗原君　本郷の高橋君　牛込の田中君

なれとともに第二の意味少々採り難し

銀座の愛讀者は二つ共に近かゝりしも亦隔靴の感あり乍去問ふに落ちすして語るに落るとあり此落ると云ふが至極全句の意味を含蓄して味あり

滿點の上懸賞を得たる人は横濱清水商店の簀越早志氏なり即

第一（前に同し）

第二　汝さん夫では自分て確るに陷るよ

又第五號には左の如き和文語を簡短に英語又は佛語に

摘譯せられむことを望滿點者に二ヶ月分進呈

第一　貴君の御贔負て私の名も大に廣ります

第二　貴君さへ一生懸命ならは私も一心に共力致しましよふ

椀久の事

樂壽亭主人

椀文物語とて種々の草紙に擧け又たは淨瑠理などにて『三つ面椀久』と云ひ世に唄ひ傳へる此の椀屋久右衛門と云ふは元來浪花の人にして性質至て老實なれは苟旦にも虚言を吐かす年長るまて青樓等へ登りしあと有ふさりしに其の朋友ども之れをあざみていかで椀久を唆のかし遊廓に伴ひ行き辱めをあたへて笑はんものと企てけり椀久の母竊かに之を聞き知りて深く憂ひしが此頃松山太夫とて全盛の遊君は情けを知れる婦人なりと聞き居れは之に賴みて我子の耻辱を免れ得させんと其よしを、まま〳〵と文にしたゝめて松山のもとへ送りぬ松山これを見て椀久の母が子を思ふ心の切なるに感しそのおとなふは心になかけたまひそわらはよきに計ふひまねふせんと返り言をそなしける母は聊か之におちゐ久右衛門にむかひて汝もし友垣にいざなはれて廓に行くおとゝもわらは必らず松山太夫をよび候ふへ彼れは情け知れる女なるそと云ひ含めけり斯くとも知らねば朋輩等はけふも椀久を辱しめんと思ひたちて一日椀久を僞りすかしてとある揚屋につれ行きれの〳〵なじめる遊君どもを招きけり椀久は母のをしへを守りて松山太夫をまねきけるに松山は豫ねてよりかくあふんと待受たれはいち早く出來りて椀久を見るより最となれなれしく寄り添ひ年ころ馴染重ねたるやう睦ましくあひしらひけり朋友等おの躰を見て案に相違しみな面赤ふめて立歸りしとなん此夜を始めとして椀久は松山の情けに感し深くもちきりを結ひけれは遂に後の世まてうき名を流すことゝはなりけり墓は浪華寺町八丁目實相寺内にありとか其頃世に由緒ある人の果とて散髮に

十德を着て竹の杖に瓢をくゝりつけ家おとの軒端に立ちて輕口いひつゝものを乞ひし隱者に瓢簞かしくといひし人ありしかば好事家か之れを椀久のことに合して一つの物語を作り出せしなりと聞けり彼の石井常右衞門といへる物語もまた是等より思ひつきしものにや知らず(柵草紙抄錄)

巢林翁の逸事

服霞峰

翁曰淨瑠璃は憂き事が要めなれども憂きを憂きといふては面白からず夫と云はずして感せしむるこそ肝要なりたとへは如何なる景色も絶景と云はゝそれまでにて止むものなれど其の摸樣を數々述べたつる時はよき景と云はもして自ら其景色の好きを知らしむるものなり某か趣向は皆これに因ると云ひしとか。

或人翁のもとに來り淨瑠璃の濡事は多く女の方より男を戀慕し色々あつかましきせりふなどあれど女はなかなかたしなみのつよきものにて如何に惚れたりとも女の方より口外するおとのなきものなれば少しく本情を破るの嫌なきやと問ひしかは如何にも女はさるあつかましきことは云はぬものなれど惣じて淨瑠璃などは表を仕組裏を工夫し上部を作り底意を作るといふ事をよく知らざれは作ることのなふぬもの中々一通の見識書物一邊の義理にかゝはる學者の思もよらぬおとにて敎より開けぬ心の片意地ものしりの草紙讀の辨へしることにあらず女のせりふにはあるまじきおと男に向ひ色色と耻かしき詞は是底意を作ると云ふ狂言の法にて女の心の底意を上部へしめして見する作者のはたらきなりと答へしとか。

翁か「傾城酒呑童子」に茨木屋幸齋が驕奢に耽りて幕府の咎を受けたる事實をかける時「金の冠きぬばかり」と綴りあとは明日とて筆を止めしに居合せし穗積以貫竹田出雲之を見て如何に狂言なれはとて町人に似あはしからぬ文字なりと云ひあへりしを翌日行て見れは右の

續きに「癪は持病にありとかや」と書きわりしかはいづれもその意外なるに驚き只管賞賛せしとなむ。

翁嘗て人に語りけるは凡て淨瑠璃は人形にかくるものなれは外の草紙と違ひ文句に活動を與へねはならず殊に歌舞伎の生たる人の藝と見くらべふるゝ業なれは心なき人形にさま〳〵の情をもたせて見物の感をとらんとするおとなれは大慨にては妙作と云はれぬものなり

某若年の折大内の草紙を讀みし中に

節會のをりふし。ゆきいとうふりつもりけるに。衞士にあふせて。たちはなの雪はらはせられけれは。かたへなる松のえだも。たはゝなるが。うらめしげにはねかへりて。

とかけり是れ心なき草木を開眼したる筆勢なり其故は橘の雪を拂はせらるゝを松か羨みてれのれも枝をはねかへし雪をれとしたる景色さなから活きて働く心地なふずや是を手本として淨瑠璃の精神をいるゝことを悟れりと』。

睦正義の親睦

久しく結むて解けさりし睦、正義の軋轢も小川亭宮松亭東橋亭の各主人か取扱によりて親和の局を結びたり

團玉の歸國

久しく聽衆の愛顧を得たる團玉は愈おたび回るにつき送別として小川亭も骨折り湊琴も自ふ心となり其他清玉外數名も之を贊けて席を開るよし同孃に別れを惜む若殿ばら必す忘れ賜ふなとは老婆心但五月一日より

諸新聞義太夫雜誌の評判

富山日報　論說は眞面目らしく義太夫と國家の關係を說きて面白く古曲の欄には上るり十二段を逐號連載し其他文園批評雜錄の諸欄皆此道の嗜好者をして賛稱止む能はざらしむ

靜岡日報　義太夫練磨專門の雜誌にして記載の目次は論說古曲文園批評雜錄雜報餘興曲子等にして艶あり

花ある事のみを輯錄し太棹家には崇拜すべき物也。

硯友　義太夫雜誌は卵の如く堅き中に軟かき事もあり且つ其道の人の爲には滋養澤山の物のみ也。

小土佐が太十を語るとき「シテ四方天田島の頭は」と云ふ所を「シテ四方天々……ジマは」と云ふて頭の字を省くは誰かよき人に習ふた者なるへし將軍が幕下を呼ふに尊號をつける筈なし是等のおとは分りやすきおとなれとも男子連中にても皆稽古本にある通り語り居れり學者にも論語よみの論語しらすあれは義太夫語の義太夫知ふす多きおと敢て怪むに足ふす

餘興 粹多樂誌

物はづくし

題　義太夫社會の事一切（到着順）

◉

凄い物は　浪六の小說と越子の節まはし　荻の屋塵外

惜い物は　千鰔鑑の沈沒と三福のかん板　荻の屋塵外

面白物は　義太夫雜誌と眞打の顏ぞろへ　同　人

小い物は　支那婦人の趾と三生のかほだ　碌々子

面白物は　義太夫雜誌と東代玉のチャリ　同　人

首振物は　角兵衞獅子の首と竹本小土佐　末廣屋要人

似た物は　酢につけた牡蠣と春玉の眼玉　能登平

堅い物は　くるみの殼と小土佐の評ばん　同　人

飽ぬ物は　三度の飯と伊達の伊勢おん頭　淺草廣居士

嬉い物は　待人來るのと綾之助の三勝　三河家小秀

早い物は　飛脚のわしと一りきの義太夫　糀町人

恐い物は　音羽屋のれ化と越子のまなお　同　人

可愛物は　桃丸の綠丸と小土佐の片笑凹　千代本小今

望い物は　金側の時計に小清に愛きやう　よし川

嫌な物は　夏の牡丹もちと岡德のいろ目　同　人

面白物は　義太夫雜誌と道中ひざくりげ　浦部不佛鬼

長い物は　象のはなと春子太夫のふし　恍亭寐男

面白物は　圓遊の滑稽談に文藏のやぐら　壽樂
似た物は　秀吉の馬じるしに鹿の子の顔　三田人成
穩な物は　成田屋のだんまりと小清演藝　神田仲猿獨戒居士
短い物は　鴨のわしと竹本清花のかはだ　知顔太夫
低い物は　エスキモーの家と土佐吉の鼻　同人
嬉い物は　初子の產れたと一二三の愛嬌　同人
盛な物は　博文館の出板書と綾之助人氣　慈山人
可愛物は　株切りの頭髮と小春の語り口　比美の家
大な物は　成田屋の眼玉と安達三のれく　同人
床い物は　茶の湯の手前と東玉の腹の中　同人
似た物は　古道具屋の惠比壽と小住の顔　同人
陰な物は　秋の雨しよぼに照勝の義太夫　同人
安い物は　忍川の料理とつる司の義太夫　信天翁
類無物は　富士の山と大隅太夫の壺坂寺　本郷桑林軒畏雷
秀逸（本誌寄贈）

○

大な物は　櫻島の大根とにしきのからだ　一立齋文玉
自句
甘い物は　暑い時の清水に團平の三絃　峰の家霞

本誌第五回餘興課題

情歌（ゼヽ一の事）　題　癪。文。浮名。

一名十首限り五月十八日堅く〆切

三光の君へ本誌一部宛呈上すべし

今回は露の家尾花と弊社の粹多樂史の二評あり腕を振ふて出吟すべし

淨瑠璃

次號よりは本誌に淨瑠璃の一欄を設け義太夫本中の名文を摘載せんとす寄稿の人は作者と外題を附記し投すべし但し評論を附するも宜し併し長かゞざるを要す

廣告

新文海

第四年第三號三月廿八日發行毎月一回一部金四錢五厘無遞送料

本誌論說には對外の精神氣象等史傳には田中邦男通亂履歷○復讎傳交通門には謹答小野璋平君文藝門には詩歌文章雜纂には歌を以て巧に詩を譯す○歌を讀むは難事にあらず○故典辨疑○俗說辨妄等を記載す又毎月懸賞の文詩歌句の募集あり既に發行以來四年の星霜を蹈むに至る

發行所　薇州文社

◎家内の目ざまし

◎毎月一回
◎一部一錢五厘

本誌項目は教育道教衛生實業小說雜草の七道具を備へたり文は單明解し易き良誌試に一本をめせ

備中國笠岡町大字笠岡

發行所　薇州文社

弊舗の寫眞は可成鮮明を主とし年を經るも變色なく且可成廉價を主とし貴需に應し約束の期限は履行可仕間何卒御來車被下度願上候

五名家の寫眞私方に在之候

上野廣小路鳥八十の隣　吉川寫眞師

今般左の處へ轉居從前の通開業仕候此段諸君に告く

午前九時より
午後二時まで

齒科治術時間

麴町三丁目十八番地（大横町）　若井金作

義太夫雜誌の投書にして間々拙宅へ御郵送有之候人御座候もかくては遺漏の恐有之候得は必ず本社編輯局宛御發送の樣願上候也

服部霞峰

上野停車場前山城屋旅舍

家屋濶大各室呼鈴の備わり食物は衛生を主とし夜具は清潔にして凡て旅客の用を達するは迅速丁寧萬事油斷なく勉强仕候間必す第一泊の上御試を願ひ併て從來の御客樣方にも猶一層御愛顧わゞん事を祈る

僊華琴

上製壹面撥附金三圓五十錢より
並製壹面撥附金二圓より二圓八十錢荷造費金三拾錢

僊華琴は形體麗雅、音質優美、音量擴大、彈法容易、携帶便利、且一器にて和漢洋の諸曲を彈するに適切なるは大に世の賞讃を得たるを以て証すべし請ふ音樂の志士試に彈味わらん事を

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

取次所　音樂雜誌社

告條

ちらし。口上がき。引札。廣告の案文。意匠などの。もとめに應ずるものは。義太夫雜誌社の紹介。峰の家霞と申ひとなり

以上

音樂雜誌

一冊金六錢半年分郵税共にて金三十五錢郵券代用一割增

本誌は歐洲樂、雅樂、能樂、明清樂、俗樂舞踊、音謠、等新古を問はず樂譜を添へ解釋を附したる者なれば初學者にも能く獨習し得るの便ある音樂の好侶たり

發行所　東京市麴町區有樂町三丁目一番地　音樂雜誌社

東洋文學

一部五錢　郵税五厘　毎月一回發行

誌中。論文。理文。美文。雜錄。雜纂。等ありて皆是今代の名文東洋文學に恥さるもの文學者は必す一本購讀すべきの良誌なり

發行所　千葉縣安房郡北條町北條千七百十九番地　智發堂

を志へ

一部　一錢五厘
郵便税五厘
廣告一行三錢

記載種目

教の園。園の珠。園の果。園の遊。園の花。

本誌は小學校生徒の友也

發行所は　岡山市大字小橋町百四十九番邸　耳目堂

遞信省誌可（明治二十六年三月六日認可）

◎投書規則

投書は凡て到着の順序を以て掲載するも未完稿は之を採らず○批評等にして類似ハの者ある時其優れたる者を掲載す○次號に讓し投書にして其事柄の既に陳腐と認むる時ハ之を省く○誌上ハ匿名なるも投書に住所姓名なき者は掲載せず○投書は眞書にて廿四字詰とし判明に認め義太夫雜誌社編輯局宛にて送るべし○投書ハ返却せず○問合せは往復はがきか又ハ郵券封入の事

社告

本誌定價　一部三錢五厘　前金の分は本社へ

地方は一部に付郵送費五厘申受く

廣告料　一行廿四字詰四錢十行以上一割引

但義太夫謠曲に關する者に限り三割引とす

代金爲替半圓以下は郵便切手にて宜敷以上は神田郵便電信支局振込受取人岡田廉二宛の事

發行所　東京市神田紺屋町四十四番地　義太夫雜誌社

明治二十六年四月二十九日印刷同三十日出版

發行兼編輯人　東京市神田區紺屋町四十四番地　岡田廉二

印制者　全市下谷區御徒町三丁目百一番地　奥山東太郎

印刷所　全市淺草區黑船町廿八番地　東京並木活版所